

東西文明の比較(2)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

前回は、西と東に同時期に文明が生まれたことを述べました。ローマと中国(秦)です。今回は、視点を変えて「文明とは何か」を考え、さらに中国文明を記してみたいと思います。

🏛️ 「文明とは」、その性質

人類の歴史は文明の歴史である。文明の起源や出現、興隆、相互作用、成功、衰退、滅亡が、卓越した歴史家などにより詳しく研究されてきた。それらの中心的主張はほぼ一致している。文明という考え方は「未開状態」の対極にあるものとして展開された。世界にはいくつもの文明があり、それぞれ独自のやり方で文明化している。人類の歴史における主要な文明は、世界の

主要な宗教と密接な関係を持っている。民族性と言語が共通していても宗教が違えば殺戮も起こる。

文明は最も広い文化的なまとまりである。村落や地域、民族集団、国籍、宗教集団などは全て、さまざまなレベルの異質性を含みながら、固有の文化を持っている。文明の輪郭を定めているのは、言語、歴史、宗教、生活習慣、社会制度のような共通した客観的な要素と、人々の主観的な自己認識の両方である。文明には明確な境界もないし、初めと終わりも明確でない。

文明は紛争や衝突の時期を経て、普遍的な国家に発展し、やがて衰えて崩壊する。

🏛️ 世界文明といわれる総数は？

多くの学者による試算はいろいろあるが、主要な文明は12存在し、そのうち7つ(メソポタミア、エジプト、クレタ、古代ギリシャ、ローマ、ビザンティン、中央アメリカ・アンデス)はもはや存在せず、存在するのは、中国、日本、ヒンドゥ、イスラム、西欧の5つである。その概要を示すと、

- **中華文明**：紀元前2500年には2つの文明が存在した。黄河文明と長江文明、後に合体して中華文明になった。ベトナムや朝鮮を包含する。(後述)
- **日本文明**：日本を固有の文明として認識。中国文明から派生し西暦100ないし400年の時期にあらわ

れたとする。

- **ヒンドゥ文明**：紀元前1500年ごろからいくつかの文明が存在。前2000年以降ヒンドゥ教はいろいろな形で亜大陸文化の中心となり、宗教ばかりでなく社会制度にまで影響を与えた。インド文明の核である。
- **イスラム文明**：7世紀アラビア半島で生まれ、北アフリカ、イベリア半島、中央アジア、東南アジアへと広まった。その結果、イスラム文明の中にはアラビア、トルコ、ペルシャ、マレーなど数多くの下位文明が存在する。
- **西欧文明**：700～800年に現れたとされる。学者はヨーロッパ、北アメリカ、ラテンアメリカの3つの主要構成要素があるという。オーストラリア、ニュージーランドも含まれる。西欧文明を構成する2大要素であるヨーロッパとアメリカの相互関係は、時代とともに変化した。アメリカの土地には、自由と平等、機会(チャンス)と未来があり、ヨーロッパは抑圧と階級闘争、階層、退化の象徴であった。合衆国が世界の舞台に立つようになると、ヨーロッパとの一体感が生まれ、自らを西欧文明の覇者と名乗るようになる。

ドーソン^注はいう。「偉大な宗教は偉大な文明を支える基礎である」。五つの「世界的宗教」のうち4つ(キリスト教・イスラム教・ヒンドゥ教・儒教)は主な文明と結びついている。仏教は初期の段階で二つに分かれた。大乘仏教は中国から朝鮮、ベトナム、日本へ。小乗仏教はスリランカ、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアへと。チベット、モンゴル、ブータンは大乘仏教の流れを組むラマ教を信じる。仏教はキリスト教やイスラム教同様、発祥の地では生き延びることはできなかった。中国や日本では在来の宗教と融合した。中国の仏教は儒教・道教と、日本では神道と。

🏛️ 文明の「遭遇」

文明と文明の交流は遭遇による。初期の遭遇は地中海東部、南西アジア、インド北部でおきた。征服によらず文化が伝播した例は仏教の中国伝播だ。インド北部で仏教が起こって600年後のことである。

紙が中国で発明され、日本に伝わったのは7世紀、中央アジアには8世紀、北アフリカへは10世紀、スペインへは12世紀、北ヨーロッパへは13世紀であ

る。8世紀に中国で印刷技術が発明され、11世紀に可動活字が発明されたが、ヨーロッパに伝わったのは15世紀である。

中国で9世紀に発明された火薬はアラブ地方には数百年後、ヨーロッパには14世紀に伝わったのである。

インドと中国はときどき他の民族の侵略を受けた。ムガル人・モンゴル人に支配されたことがあったが、自らの文明の内部で長期にわたり「交戦国家」の時代を経験していた。ギリシア人は同じ文明の内部で戦争し、交易することが多く、ペルシアをはじめとする非ギリシア人との交渉はずっと少なかった。

中国の多様な古代文明

1970年代、浙江省の長江流域で河姆渡遺跡が発見された。紀元前6000年ごろには稲作文明があったことが証明された。従来の中国古代文明は「黄河文明」との通説を覆すものだった。

秦嶺山脈が中国大陸を南北で分断する。北を流れる黄河流域は小麦栽培の文明。南の長江流域は稲作文明圏である。更に内モンゴル東部から遼寧西部にかけての遼河流域にも別の文化圏があった。遼河文明と呼ぶ。ナラ・クリ・カエデ・シナノキなどの温帯落葉広葉樹林帯、東日本のナラ林帯と共通する植生を持つ地域。ナラ林が産する堅果類は砕いたり煮ることで栄養価の高い食料となり、乾燥させれば貯蔵食品になった。

黄河文明

その前半を仰韶文化(紀元前5000～3000年頃)が黄河中流域で栄えた。点在する集落には200人規模のものもある。周囲を囲む環濠の中に中央広場があり、それを囲んで竪穴式住居が並ぶ。アワ・ヒエやムギ・コメも栽培されており、ブタやウシ・ヒツジ・ヤギなどを飼育され、養蚕も行われていた。彩文土器は動物、人面、幾何学模様を白・黒・赤などで彩色した祭祀用土器である。

後半を山東龍山文化(～前2000年)と呼ぶ。遺跡からは轆轤ろくろを使った精緻な陶器が出土し、大量生産も行われたようだ。石包丁などの石器や骨角器、ヒスイ、後期には青銅器も出現する。大型の集落が登場し、周囲に敷地を持つ住居も出現した。農業も発展し、イネ栽培を初め、牧畜・養蚕・染織も行われていた。動物の骨を使用した占いが行われており、原始的宗教の摇篮がすでにあったと思われる。

長江文明

長江中流域の屈家嶺文化(紀元前3000～2500年ごろ)と、下流域で栄えた良渚文化(紀元前3300～2200年)の時代が最盛期である。長江流域では紀元前4000年ごろには水田が出現する。それまでは稲作でも沼地などにイネを植えるだけであったが、このころになると、畦を作り、水を張り汲水と排水ができる装置ができた。水田を持つ集落は次第に大規模化する。やがて直径300メートルもある環濠と土塁で防御した集落が見られるようになった。

紀元前3000年ごろになると、500人を超える大集落が出現。血族的集団から政治的、宗教的な結びつきをもつ集団へと移行し、首長が集団を束ねるようになる。また狩猟用の道具が大幅に改良され、武器も作られてくる。明らかに集落間の紛争・戦闘があった。土塁はいっそう高くなり、8メートルを超えるものも出現した。巨大な城郭集落の成立である。

中国文明—「国家と民族」の関係

現在の地に「中国」と呼ぶような政治的統一体が最初にできたのは、紀元前221年の秦による統一であり、それ以前の中国は「東夷・西戎・南蛮・北狄」の諸民族や諸国、諸王朝が、洛陽を中心とする黄河中流域の盆地を巡って攻防を繰り返す中から、中国人すなわち漢民族＝華夏族が形成された。

中国人とは「夷狄」とされた諸種族が相互に接触・混合して形成された都市住民のことであり、人種としては「蛮・夷・戎・狄」の子孫というのが正しい。中国文明の脱種族的でその時々^のの辺境地域または種族を防御的に吸引する歴史的同化力に「中華」的なものの本質の起源があったのである。

同時期に存在したローマ帝国には、常にその中核に、種族・文化いずれにも、狭義のラテン的・イタリア的起源が一貫として鮮明に存在した。中国の場合それが、いずれの構成要素ともまったく異なる新しい形態がそのつど生み出されていた。そのたびに根本的な全面的変容が繰り返し引き起こされていた。これこそ「玉ねぎ」型中国の生成プロセスの始まりだ。

■注

ロムルス：アブラハム・コンスタンティン・ムラジャ・ドーンソン(1779～1851)トルコ系アルメニア人の外交官・歴史家。世界10数か国語に通じた。特に「蒙古」の研究に強い。